探　究

探究Co便り　文：伊藤
令和６年９月５日（金）
NO. 6

教科でも探究　社会科　編
～「素材の本質」に迫る　教師の探求～

「まさかこんなに『川』のことで頭がいっぱいになるとは思いませんでした」とはある日の加藤先生の言葉です。総合でも川そして、社会科でも川。５年３組では今週から女鳥羽川を素材にした「**昭和３４年の女鳥羽川の氾濫から考えるまちづくりと防災**」の単元が始まりました。この単元名には、女鳥羽川のなにをどの角度から見つめ、そしてどんな価値にせまっていきたいのかという私と加藤先生の願いが込められています。そうした「素材の本質」を導き出すまでの加藤＆伊藤２人３脚の「探求」の様子をご紹介します。

白紙の状態から手探りで始めた素材研究、まずは情報を集め、人に会い、「これは！？」と、私たち自身がゆさぶられる事象にであう度、２人で議論を重ねてきました。「都市デザイン学習会」の代表山本さんからは、女鳥羽川に関わる様々な市民活動について、元松本城管理事務所の研究員、後藤先生からは、女鳥羽川の歴史について、そして都市デザイン学習会主催のワークショップでは川とまちづくりについてお話をお聞きしました。地道に素材研究を続ける中で、「女鳥羽川の氾濫によって破壊された旧開智学校の写真」という資料にであった時の衝撃は忘れられません。その後、昭和３４年の女鳥羽川の氾濫を経験した小池さんから被災体験をお聞きしたり、奈良井川管理事務所で治水とまちづくりについてお話をお聞きしたりするなど「防災とまちづくり」に関する素材研究をさらに深め、単元の核となる「素材の本質」を導き出しました。（詳しくは単元展開をご覧ください）

「昭和３４年に起こった氾濫はどのような災害だったのか？」「その災害の後にどのような工事や対策が行われたのか？」実はこうした素材研究の中での教師の探求の歩みと、単元の中での子供達の探求の歩みはしだいに重なっていきます。だからこそ私達２人は、先ずは自身の探求に徹したのです。そして、同じ事象を見ていても私と加藤先生の考えにも違いがあったように。やがて子供たちの考えにも「ずれ」が生まれると予想しています。そして、その「ずれ」が生まれる子供同士の語り合いの中にその子らしい生き方や価値観、こだわりが表れる。加藤＆伊藤はそんな授業を目指して授業づくりをがんばっています。

小池薬局の小池さんから聞き取り

S34　女鳥羽川の氾濫